

# アトリエ 琉游舎 だより 83号

アトリエ琉游舎 [ryuyusha.com/](http://ryuyusha.com/)

2020年7月15日発行

琉游舎for healing <https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3>

## 男梅雨 送り梅雨



## 女梅雨 返り梅雨

- 関東地方の平年の梅雨明け日は7月21日だそうです。今年はどうでしょうか。烈しく降ってはサッと止むことを繰り返す梅雨を男梅雨と呼びます。ひと昔前の快男児のイメージ。しとしとと長く降り続く梅雨を女梅雨といいます。ひと昔前のしとやかな女性のイメージ。
- 性差を表す形容詞はジェンダーフリー時代にはふさわしくありませんが、今や絶滅危惧種となった「快男児」や「しとやかな女性」。「男梅雨」も「女梅雨」ももはや死語ですね。
- 今年の梅雨はザーッと烈しく降ってはしとしとと長く降り続く、雨の止み間のない四六時中夫婦喧嘩をしているような梅雨ではないでしょうか。鍋釜包丁が飛び交うような烈しい豪雨の後にはだんまりのにらみ合いが続く、いつ止むとも知れないしとしと雨の持久戦。
- そろそろドカンと大きな雷がやって来る頃です。梅雨明けの合図です。雷とともにひときわ烈しく降る梅雨最末期の雨が「送り梅雨」です。文字通り梅雨を送り出して夏を迎える雨。
- 待ちに待った夏到来と思っていると「返り梅雨」があるかも知れません。梅雨に逆戻りするよう2、3日降り続く雨。あまり歓迎できませんが、梅雨も名残を惜しんでいるのでしょう。
- 最近頻繁に聞く「線状降水帯」。この言葉は四季折々の日本に降る数多の「雨の名前」を一気に吹き飛ばすほどの破壊力を持って私たちの元にやってきました。「雨」は気まぐれな天の暴力ではなく、常に天の恵みであって欲しいと願いながら梅雨を送りたいと思います。

参考：「雨の名前」高橋順子著

木 金 土 日

### 7・8月スケジュール

月	火	水	木	金	土	日
			16 映画会 13:30	17	18	19
20	21	22	23 映画会 13:30	24	25 居酒屋の会 16時半	26
27	28 読書会 13時半	29	30 映画会 13:30	31	8月1日	2 写経会 13:30
3	4	5	6 映画会 13:30	7	8 詩話会 13:30	9
10	11 読書会 13時半	12	13 映画会 お休み	14	15	16 お盆施餓鬼法要 10時半
17	18	19	20 映画会 13:30	21	22	23

**読書会**  
7月28日(火)  
8月11日(火)  
13時半から

**写経会**  
8月2日(日)  
13時半から

**詩話会**  
8月8日(土)  
13時半から

**映画会**  
毎週木曜日  
13時半から

**居酒屋の会**  
毎月25日  
16時半から

先日身延山に行って参りました。ここは日蓮宗の総本山です。流罪を赦免され佐渡から戻られた日蓮聖人がその残りの人生を思索の深化と弟子への教化に捧げた場所です。そこには久遠寺が建てられ毎日多くの参詣人が訪れる日蓮信徒の聖地です。私もこの場所は幾度となく訪れています。修行の時を除けば大概是久遠寺三門から菩提梯という287段標高差約104メートルの階段を息を切らしながら直登し本堂に参拝、日蓮聖人の墓(祖廟)や草庵跡を巡り、余力があれば奥の院までのプチ登山、門前の仏具屋さんを数件覗いた後は下部温泉へ。そして翌朝五時半からの朝勤に出て気持ちを新たに、また自分のあるべき居場所に戻ります。

日蓮聖人がご存命の折にも多くの門弟が身延山を訪れ対面を請いました。下部温泉の湯治のついでに訪問したという者には真剣な信心が認められないとして面会せず、追い返していたようです。老齢の内房の尼御前が訪ねてきた時も、氏神に参詣したついでに来たと言ったので、聖人は、仏が主で神は従であるとの道理を尼に分からせるためにあえて面会しなかったとみずから消息文(手紙)に残しています。**注1**私もこの尼のように聖人に追い返されていたのでしょうか。今回私は身延山の前に諏訪大社を訪れています。朝勤の前夜には下部の温泉宿に泊まり地酒を飲みながら山梨牛に舌鼓を打っていました。下部と諏訪大社と身延山のどれがついでなんだと詰問されても、ものついでなど何もありません。身延で聖人のお心に触れ自分の日々を新たにすることと同じくらい、下部の湯で身心を労りつかの間の贅沢を味わうこと、諏訪の御柱にまみえ今に連綿と続く日本人の心の不思議を感じることに、どれも私には日々を過ごすための大切な一コマなのです。

原始経典の中にあるお釈迦様の言葉です。「たとえ樹を切っても、もしも頑強な根を断たなければ、樹が再び成長するように、妄執(渴愛)の根源となる潜勢力をほろぼさないならば、この苦しみはくりかえし現われ出る」**注2**妄執の樹は切ってもいずれまた大樹へと成長していく、目に触れない地中の根を断たなければ、渴愛を断つことはできない、渴愛を断ち切らねば苦しみは尽きることなく襲いかかる、とお釈迦様は言われているのです。私たちはのこぎりやチェーンソーで比較的簡単に樹を切ることができます。しかしそのままにしておく切り株の横から枝が伸びいつの間にか樹木へと成長していきます。では根こそぎ掘り起こせば良いかという、これが木を切る何倍もの労力を要します。私も庭の小さな雑木を切りましたが、鋤一本では根っこを取り除くだけの気力も体力もなく未だに切り株はそのままです。かように根は厄介です。ましてや潜在する見えざる妄執の根はではどうやって断ち切れれば良いのでしょうか。「愛欲の流れは至るところに流れる。欲情の蔓草は芽を生じつつある。その蔓草が生じたのを見たならば、知恵によってその根を断ち切れ。」**注3**蔓草は厄介です。四方八方に伸びる蔓の跡を辿って根っこに行き着くと、そこは木化していて深くひろく根が張っています。これを鋤で断ち切っても気がつけばまた蔓草が生えています。雑草は土と空気と水と光がある限り必ず生えてくるでしょう。この人と雑草のモグラたたきを根本的に解消するための根絶やし方法が、私には思いもつかず実践もできません。ましてや欲情の根においてはなおさらです。

お釈迦様は蔓草に例えた欲情を智慧によって断ち切れと言われました。欲情とうまくつきあって生きていくのではなく根本からその根をすべて断ち切って二度と生えてこないようにしなさいということ、そしてそれは智慧によって可能だと言われているのです。この「智慧」は仏さまの智慧です。これは「善」か「悪」か、「真」か「偽」かなどのように「AでなければB」「BでなければA」と判断する人間の知恵とは全く違うものです。すべての存在は因縁によって生じ、因縁によって仮に存在しているもので実体はないと観る智慧です。例えば、一粒の種を「因」とするとそのままでは何も生じませんが、これを土に撒き雨や日光や肥料と言うような様々な「縁」の力が加わると、種は花開き実を結び「果」となります。「因」と「果」の間に無数の「縁」が作用して相互依存しながら常に変化し存在するというものの見方です。これが佛教の基本的世界観です。これを佛教用語では「真如」「実相」「不二」「一如」「空」と言います。どれも「一切の諸法は因縁より生ずる、その因縁を如来は説き給う」の偈文**注4**を術語にしたものです。「色即是色」「空即是色」も「ありのままに観る」も同じ意味です。このすべての存在をありのままに観るといふ仏の智慧を私たちも得られれば、欲情の根を断ち切り苦から解放されると、お釈迦様は語られています。

私の欲情の根は地中に縦横無尽に張っています。そして他人の根も同じように地中に張り巡らされ自分のものと区別できないくらい複雑に絡み合っているでしょう。私たちがありのままに欲情の根を観れば、もう自分1人ではどうしようもないほどに因縁に絡み取られて身動きがとれなくなっている自分しか見えないでしょう。しかしお釈迦様はその根を断ち切れと言います。そんなことが可能でしょうか。社会という因縁から逃れて、独り天上天下唯我独尊とうそぶくことは可能でしょうか。そのような問いをお釈迦様以来、今に到るまで問い続け行い続けてきた人たちが仏教者と呼ばれる人たちです。「可能か不可能か」と結論を出すことが仏教者の道ではありません。「可能と不可能」の間を絶え間なく行き交いそれをありのままに観て、行い続けることに毎日を生きること、それが仏教者の「根を切る」ことそのものなのです。

日蓮聖人の「ついでに来ました」と失言(本音?)した人を追い返した一事に、厳格で不寛容な宗教家と見る向きもありますが、遺文を読むと情に篤く面倒見がよく女性に優しい酒好きの人物像が見えてきます。私は遺文の人柄に甘えて、1年に一度は身延山詣で聖人の教えにふれ、ついでに下部温泉 琉游舎:戸井 出琉・恭子で聖人とバーチャル酒宴を催したいと考えています。(乞う同好の士!)